

林 雅彦 著

日本の絵解き

— 資料と研究 —

三 弥 井 書 店

林 雅彦（はやし・まさひと）

昭和19年東京に生まれる。昭和20年山梨に疎開する。昭和42年山梨大学文芸科卒業，昭和49年東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。

武蔵高等学校・武蔵中学校教諭を経て，昭和48年学習院女子短期大学専任講師，昭和51年助教授となる。昭和55年明治大学法学部助教授に転じ，現在に至る。

昭和55年第6回日本古典文学会賞受賞。

編書に『説話文学Ⅰ・Ⅱ』（共編，双文社出版，昭和56年），主論文に「性空上人説話攷」（『国語国文論集』第3号，昭和49年）「女人と穢土浄土（上・中・下）」（『国語国文論集』第4・5・6号，昭和50・51・52年）「絵解き道成寺縁起絵巻」（『月刊百科』第224号，昭和56年）がある。

日本の絵解き

定価五三〇〇円

昭和五十七年二月二十二日 初版第一刷発行

◎著 者 林 雅彦

発行者 吉田 栄 治

発行所 株式会社 三 弥 井 書 店

〒一〇八 東京都港区三田三一二一六
電話 東京（〇三）四五二一八〇六九
振替 東京九一二二二二五

大文社印刷・田島製本

三〇九一―三〇一〇―八〇三〇
乱丁・落丁本はお取替えいたします

序 文

大 岡 信

『日本の絵解き―資料と研究―』は林雅彦氏にとって最初の単行の著書である。私は著者とは、同じ大学の同じ学部で同僚であるというゆかりを持つ者だが、絵解きについては深く知るところがない。その意味でこのような専門分野の研究書に序文を寄せる資格などない人間である。しかし林氏のたつての要請辞みがたく、一文を草して林氏の門出へのささやかな祝いの花束とする。

絵解きには小数の先駆的な研究者たちの発掘と位置づけの業績がすでにあるが、全体としてまだ未開拓の分野を広く残している研究領域である。林氏は長らく仏教説話の研究を進めてきたが、その展開の必然にしたがつて、近年は絵解きと文学の関係をもっぱら追求している。文献資料の博搜と実地調査とをきわめて精力的に進めているが、氏の目下の主な追求の的は、『立山曼荼羅』『立山手引草』など立山信仰をめぐる資料の発掘紹介と研究、および『道成寺縁起絵巻』の絵解きをめぐる同様の資料発掘と研究にしばられていて、それらをめぐる論考の集成が本書の主な内容をなす。さらに、熊野比丘尼がなりわいとした絵解きの実態解明という重要な仕事も、これらの研究と当然並行して進められている。

林氏の研究活動は、書齋に座して古文獻を丹念に調べるだけでは立ち行かない。したがってたえず旅に出ている。精力的に歩き、その成果を着実にまとめてゆく。そのような旅の中で今日までに氏が発掘した最大の資料は、本書に

翻刻されている『立山手引草』であろう。立山信仰という、ある意味では日本人の民間信仰の実態とその社会的・精神史的な諸特性をこよなく鮮かに示している信仰形態の研究にとって、説話画『立山曼荼羅』の絵解き台本とみられるこの『立山手引草』の発見・翻刻はひとつの画期的な意味をもつものだろうと思われる。

林氏はこういう基本的な資料の発掘とともに、たとえば立山信仰と女人の関係に関する「絵解きと説話文学」のような論文によって、上述の日本人の民間信仰の実態とその社会的・精神史的な諸特性の研究に、鋭く、かつ用意周到な裏付けをもった追求を進めている。

「立山には地獄がある、そこへ行けば死んだ人に会える、この山で願えば、亡者を影のごとくに見ることが出来る、とかつて人々は信じて疑わなかった。立山信仰の中に占める地獄思想の割合は甚だ大きかったといえよう。」（「絵解きと説話文学」）

こういう地獄思想は、かの日本思想史に大きな影をおとしている源信の『往生要集』のような思弁の書を直接の媒介とするよりも、立山曼荼羅のような地獄絵の存在を通して、広く民衆の間に浸透していったのだろうというのが、林氏の研究を支える重要なモチーフであろうが、このモチーフはきわめて正当でまた含蓄ゆたかなものだと考えられる。

地獄への恐怖と関心は、実をいえば救済願望の強烈な表れにほかならないので、林氏はもちろんその問題にたえず研究の焦点をあてている。氏の論は、文献的な裏付けとフィールドワークによる資料博搜との両面を安定した研究の力量によってみごとに噛み合わせ、平明達意の文章によって主題を明晰に浮彫りし、門外漢たる私のごとき読者にもその蓄積の深さを十分に感じとらせるものとなっている。

「古代人は、立山をはじめ全国各地の山々の噴火などの火山活動が齎した諸種の現象を、驚異と畏怖の念で眺めて

いたに相違無い。それが、平安時代になると、日本固有の山中他界観と仏教の地獄思想とが結び付き、それぞれの山中には地獄が存在し、その地獄に亡者が多数墮ちているという信仰を生ずるに至った。それと同時に遅れて、山頂には（地獄と相對する）帝釈天の止住する切利天浄土や阿弥陀のおわす極楽浄土があると考えられるようになったのである。」（同前論文）

林氏はこういう立山信仰における地獄極楽観と女人の極楽往生との関係を重視し、『立山曼荼羅』の現実的効用をもその点に關係づけて論じている。論旨は興味深くかつ刺戟的である。

「十月から翌年五月上旬にかけての農閑期、芦峯寺衆徒（御師）は、経衣・血盆経・立山牛王・護符などを携えて、諸国配札の檀那場廻りに専念した。定宿に集まって来た道者衆を前にして、夏季の立山禅定（登山）を勧めると共に、立山禅定の許されない女性たちには、地獄谷での血盆経供養・大施餓鬼法要の代参と芦峯寺の布橋灌頂への参加を勧めた。この時の絵解きに用いられたのが、『立山曼荼羅』なる説話画である。蠟燭の灯のもとで、『生きて地獄極楽を此の眼で見、弥陀如来、勢至菩薩、觀音菩薩三尊の御来迎を拝み得るのは天が下には、わが越中立山あるのみ』と強調し、又、布橋灌頂についても、『女人の罪障消滅し即身即仏、極楽往生の唯一不事なり』と説き、見る者聞く者の心を奪った『立山曼荼羅』の絵解きは、約二時間に及ぶものだったという。」

「女人禁制の時代にあつて、ひとり芦峯寺では、立山の女人堂ともいべき嬪堂を中心に女人救済・女人往生を強く主張したのである。これに対して、岩峯寺においては、前節で見た如く、女人救済があまり説かれていないのである。」

「立山信仰に関する説話の場合、圧倒的に女人譚が多い。言い換えれば、立山信仰は、女人説話の中で語られて来たといえよう。形こそ違え、芦峯寺系の『立山曼荼羅』においても、とりわけ、布橋灌頂・血の池地獄・賽の河原等

々、女性を意識した部分が強調され、絵解きされて来たのであった。」(同前論文)

このような論文が、もう一方で『立山手引草』の発掘翻刻という仕事と並行しているところに、林氏の研究の重要な所以がある。

私はここでは立山信仰に関する氏の研究についてのみ触れたが、『道成寺縁起』の絵解きや熊野比丘尼の絵解きをめぐる諸論文も、論の構えの良さと言ひ、文の明晰さと言ひ、この気鋭の学者の仕事に大きな信頼を寄せるに十分な出来映えを示していると思う。

林氏はこれらの仕事の大部分を、前任校だった学習院女子短期大学在職中に手がけている。それを明治大学法学部に移ってからさらに充実させて、今回のこの本が実ったわけである。これら一群の業績に対しては、先ごろ昭和五十五年度第六回「日本古典文学会賞」が与えられた。同僚としてまことに慶ばしい思いがあった。

私事にわたるが、説話文学研究の新進学者としての林氏を知ったのは、すでに十年ほど前のことになる。当時林氏は東京の私立武蔵中学に奉職していたが、氏が担任していた二年生のクラスにたまたま家児が在籍しており、林氏の授業に傾倒していた。林氏の研究に注目するようになったのはその当時からのことで、今日氏が私どもの同僚となるにいたったのも、その機縁によっている。そこで私は息子に言うのである、「おまえはいい勘しているよ」。

林氏の著書第一作への序として、このような私的逸脱はいささか不謹慎にわたるかもしれないが、祝意の表れとして大目に見ていただきたい。

一九八一年三月吉日

目次

序文……………大岡信

〈資料篇〉

- I 絵解きに関する絵画資料……………九
- II 『立山手引草』……………九
- III (一)『道成寺縁起絵とき手文』……………八
- (二)『道成寺縁起絵とき(千年祭本)』……………六

〈研究篇〉

- I 絵解きの内容・芸態及び歴史……………一〇九
- II 熊野比丘尼の絵解き……………一三六
- III 絵解き一見……………一四七
- (一)地獄語りの文芸……………一四七
- (二)描かれた熊野比丘尼……………一五〇

(三) 越中井波瑞泉寺の『太子伝会』 <small>たしでん</small>	一五
(四) 越中八尾本法寺の『法華経曼荼羅図』.....	一六
(五) 道成寺の絵解き.....	一六
IV 絵解きと説話文学——立山地獄と女人——.....	一六
V 説話画『立山曼荼羅』の世界.....	二〇
VI 絵解き台本『立山手引草』——構成と特長——.....	二七
〈付〉絵解き研究のための参考文献目録.....	二六〇
跋 文.....	二七
文献資料索引.....	二七
初出一覧.....	二八〇

資
料
篇

I 絵解きに関する絵画資料

説話文学と説話画

国文学界において、「説話文学」研究の急速な進展がなされたのは、昭和三十年代である。

昭和三十五年二月に刊行された益田勝実氏『説話文学と絵巻』（三一書房）は、戦後最初の単行本として世に問うた説話文学論書であった。説話文学とは、「口承の説話と文字の文学との出合いの文学、世間話ととつ組んだ文学」であり、古代末期の新文学だと規定され、昔話・伝説・物語文学等との異質性、あるいは絵巻物における説話の享受をはじめとする説話文学研究の新しい方向を示唆した書として画期的なものであったことは周知の通りである。

又、二年後の三十七年五月、質量共に最大の説話集たる『今昔物語集』に正面から取り組んだ国東文麿氏の『今昔物語集成立考』（早稲田大学出版部）が出版された。氏は、構成と組織・説話伝承・撰者等の問題を取り上げたが、なかでも『今昔物語集』の各巻各話がきわめて緻密な組織・構成を有すること、即ち二話一類の様式をもっており、そうした様式は『三宝感応要略録』に学んだと論じられ、以後の成立論に多くの影響を与えたのであった。

翌三十八年三月には、西尾光一氏『中世説話文学論』（塙書房）が出された。本書は、説話の文学性と説話的発想を追求してきた氏が、説話文学を中世文学のジャンルの一つとし得るか否かを主題に、『今昔物語集』以下中世各説話集の成立契機や史的意義付け、特質等を論じたものである。前掲益田氏説を含め、「説話文学」の概念規定をめぐる

諸説を比較検討した上で、「説話文学とは、説話集およびその他の書物に収載された口承・書承の説話が、伝承的説話的発想の文学としてのジャンルを形成したもの」と規定されたのであった。戦後の説話文学研究の一つの到達点を示すと共に、それ以後の説話集研究に大きな一石を投じた書である。

右に掲げた三書の刊行と前後する昭和三十七年五月には、西尾氏らを中心に説話文学会が設立され（第一回大会を五月二十日開催）、爾来説話文学研究の進展・隆盛をもたらしたことは、もとより周知の如くである。

※

一方、美術史の分野において、「説話文学」と深い関わりを有する「説話画」が大いに注目される契機となったのは、昭和三十五年五月一日から二十九日まで京都国立博物館において開催された「日本の説話画」展であったといえよう。屏風絵・掛幅絵三十八点と絵巻物五十五点の展覧は、美術史研究家はもとより、日本文化史・宗教史・文学史研究の諸家の間でも多大の反響を呼んだのであった（翌る三十六年四月には、同題の図録集『日本の説話画』（便利堂）が刊行された）。

その際の展覧目録の中で、企画者の梅津次郎氏は、「説話画」の概念を初めて次のように規定されたのである。

「説話画」なる語は、ほぼ漢訳の仏教經典中に見える「変」（或いは「変相」）に対応する言葉として用いたものである。仏典の「変」は、その原語を明らかにしないが、中国語の「変」の原義中に含まれる「変現」の意から、仏教経説の説話内容を造型的に表現したものを指す言葉として使用されている。もう少し具体的にいうと、仏伝・本生・譬喩譚の図から各種の浄土圖などに及ぶもので、大小乗の顕教美術（彫塑・絵画）の主要な領域を包摂する概念である。したがってこの「変」（或いは変相）を意識すると、「仏教説話美術」（彫塑・絵画その他を含む）とも表現するのが適当と思われるのである。ところが、中国も唐代に至ると、「変」の用法が一般化し、仏教説

話に限らず、世俗的題材の説話美術にまで拡大使用されるに至っている。我々は、ここでは、そう云つた広義の説話美術のうちの絵画の意味で、「説話画」という語を使用した。

しかし我々が、「変」に「説話美術」の語をあてたのには、もう一つの理由がある。それは説話美術は、印度・西域・中国・日本に於いて、これを前にして説明する所謂絵解の風習が存したことに関連する。(中略)「変文」は絵を前にして大衆にこれを説明するための台本であつたことは明らかである。(中略)変は屢々絵解を伴うといふことから説話画と云う表現は適當のように考えたのである。

即ち、仏教的題材のものに限定せず、世俗的題材のものを加えた広義の説話美術のうち、絵画作品を「説話画」と称すべきであり、しかもそれら「説話画」は、多くの場合絵解きを伴うものである、と述べられたのである。私が本書中で用いる「説話画」の概念も、言うまでもなくかかる梅津氏所説に従うものであることをおことわりしておきたい。

とまれ、右に述べた如く、奇しくも国文学界における説話文学研究の活発化・進展と、美術史の分野における説話画研究のそれとは、ほとんど同時期だつたことが知られるのである。即ち、説話画を示しながら、話や経説の内容等を説き聞かせる「絵解き」の総合的研究は未だしであつたが、今日見られる絵解き関係の多くの成果は、この時に端を發したといつても過言ではなからう。

※

ところで、説話画と絵解きの関連については、本格的な研究が緒についたばかりでもあり、問題点が少なくない。二、三の例をあげれば、経説絵の場合、説話性の豊かな、そして現に絵解きがなされた『観経曼荼羅』、即ち俗称『当麻曼荼羅』や『二河白道図』と、阿弥陀と聖衆が雲に乗って飛来するさまのみを描いた所謂『来迎図』との間には、

一線を画した方がよいかと思われる。又、純粹な宗教行事の席で用いられる『法華曼荼羅』と、富山県本法寺をはじめ各地に伝わる『法華経曼荼羅』のようなストーリーのあるものとは、同一視すべきではなからう。あるいは、分類を例にとっても、『刈萱親子御絵伝』や『恋塚寺縁起絵巻』の如き類は、本書研究篇Ⅰに述べるように、仮りに物語・伝説絵の項目を立ててはみたが、寺社縁起絵に組み込むことも考えられよう。内容分類に掲げた説話画の大方は、少なからず宗教性を帯びていることも否めない事実であり、どのような分類が最も適わしいかは、今後さらに検討を要する。

こうした多数の課題の解決は、後日に期することとして、本章では、過去又は現在に絵解きの確証ある説話画に限定し、しかも紙幅の都合上、研究篇に関連する絵画資料を掲げるに留めた。

写真・図版提供者

- 萩原龍夫氏〔図3〕
- 西明寺〔図5〕
- 赤間神宮〔図7、14〕
- 至文堂〔図25・34〕〔『日本の美術』132号・121号〕
- 国学院大学図書館〔図30〕
- 角川書店〔図35、37・40〕〔『洛中洛外図』〕
- 広瀬誠氏〔図49〕
- 立山町役場〔図55〕

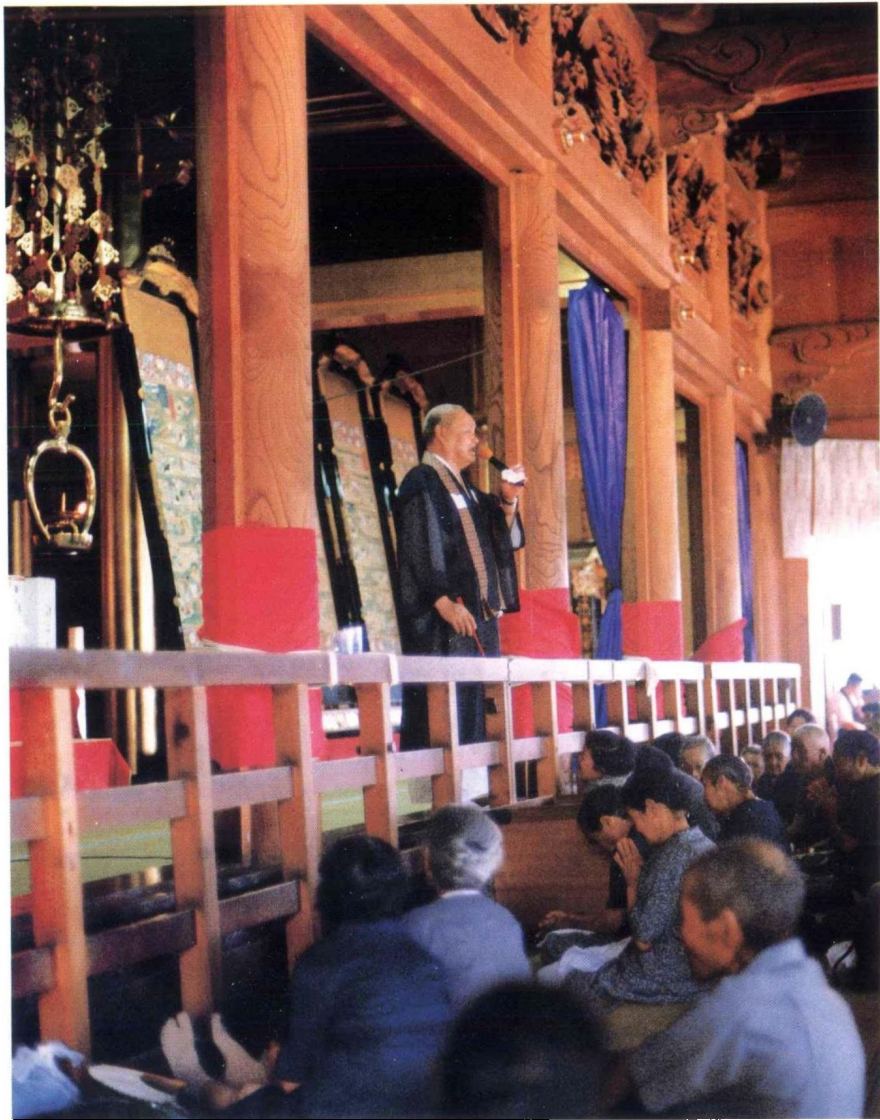


図 1 『聖徳太子絵伝』の絵解き・吉沢孝誉師（富山県井波町・瑞泉寺）



图2 根野比足尾の繪解き（住吉神社祭礼図『屏風』部分）アメリカ・ソリア美術館蔵